へ 5
4418
1

門へ5 4418 巻1
へ5 4418 1-2

文政二己卯仲秋刻成

成美先生著

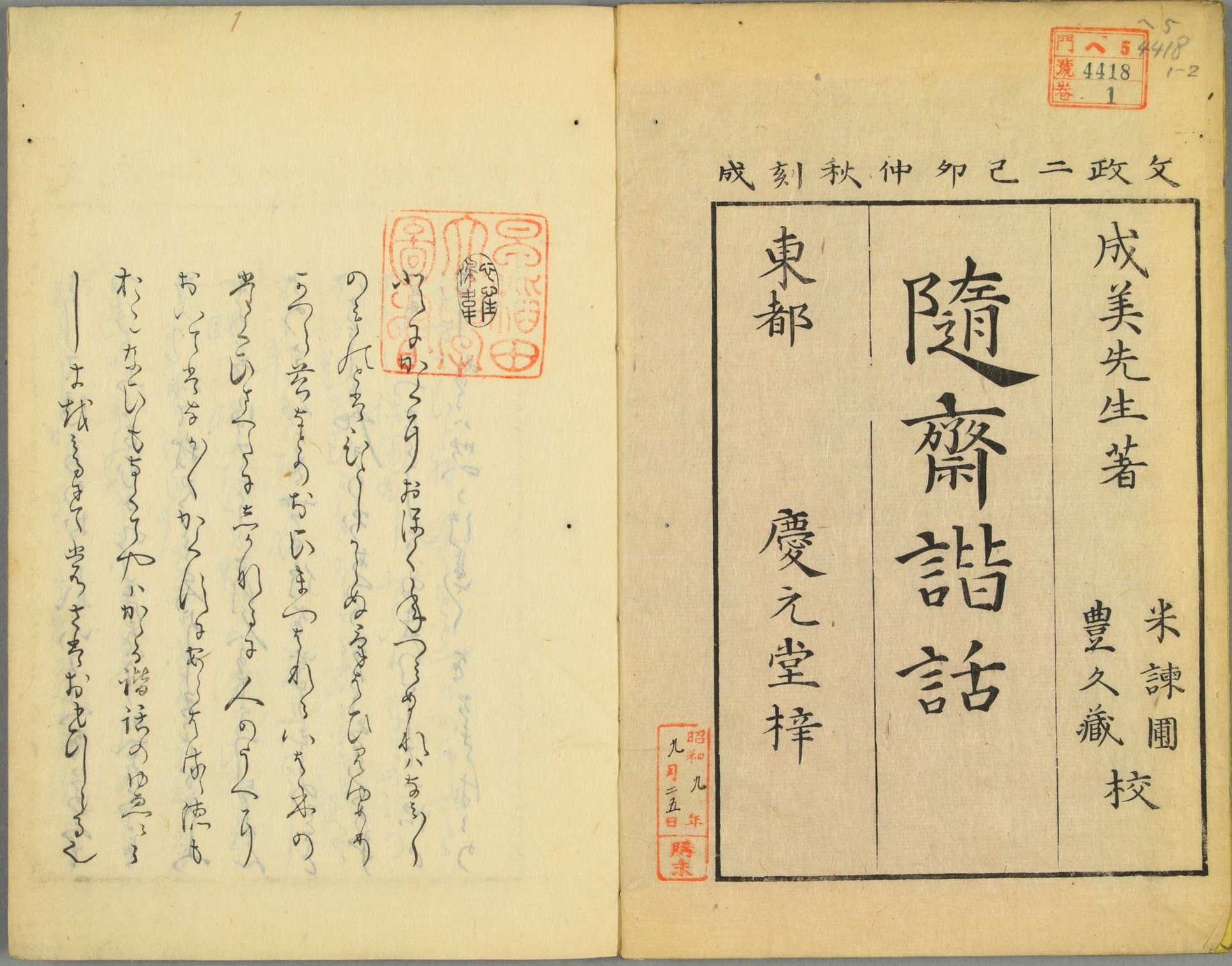
隨齋諧話

米諫園 豊久藏 校

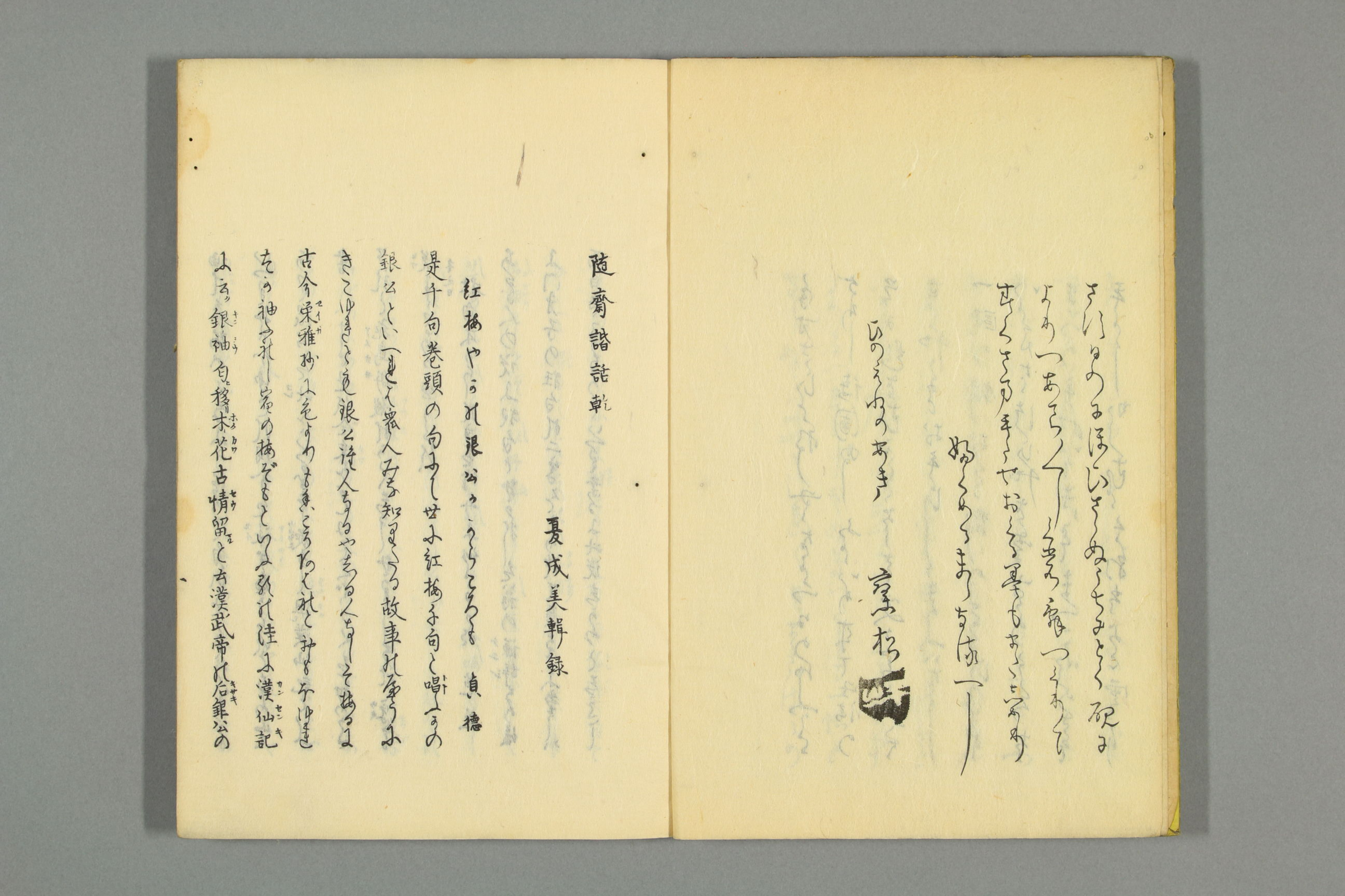
東都 慶元堂梓

昭和九年九月二五日 購求

帝国図書館蔵書



まりて隆盛のおもかれいとをこのみて
つねよりふかくむしのこゑをきゝ
やがて初て我人こゝろをなぐさめ
その中にはてをしまうつくしん人
よのうるさきせをいとなみのこゝろを
いたくこゝろにそのあるかのあるかの事
なるまつまをめぐりて一宿と
なりぬ八月のはじめ



隨齋諧話 乾

夏成美輯録

紅梅やうれ浪公のうらうらも　貞徳

是千句卷頭の句なり世人紅梅を句と唱へるの銀公といふ人を知らざる故事を爭ふ

きこゆきと見浪公注人ちるやもる人ちりそ梅るよ

古今栄雅抄に見えたるわきまえなくゆきたの袖ふれ宿の梅ぞもといふ孔注に漢仙記

に云ふ銀袖白と移木花古情留と云漢武帝れ石銀公の

袖に糸桜のこるよう活けて自ひとりくらすこと
いつまでかゆきとけぬ詞今も咏す面うらにとりの空
なのを眼にそこにとこるる事疑なし但漢仙記とい
書　いまし見れば全文をえねくくぐくくを記あるる
うれしく飛鳥井殿れうくたうしかのまきしられて深る
説まてある面うれ
冬之日
狂句木がらしの身を行舟よ俤るこう形　芭蕉
あるる人の説よ狂句とかの折しを蕉の謙辞ちう法
よ門弟子の狂句れ二字をとの捨て集ちをよ当ハ
面白きるちといるを書るよ此説ちうあこちるし

まり句を作るふ人よ新をるるもなりで遥遥の詞を
おくしき謂なし芭蕉の此の格調よして此ま
法廟年を経て杜丹藁しうく芭蕉をかして
世にあらふ女なら物をれ猿をきく人時日月を
風雲を吹てれ寺ひあるるなり此句ま狂句れ
二字なりて本風味あるつくるの師れ句を後
みだわよなるるめ削らんる甚いきちー文字あわ
しあるたるし此句ろをよりて臆説をるすを心
得てしー林るを是等れ体裁ちるをちら及ばまや
但竹齋を尾張の名護屋よなりて後よ江戸神田

工夫す醫を業とし狂歌をよくす世人の
仰ぎや行為されるわとして草紙あり
俳諧の句に点あるをするものを百韻の中二三
十句を逸興なる句を長点をつる
ものに二三句を貞徳季吟芭蕉のごとき大家の
ぬ是なり浪花の家因西雀れい流より次第に
点の句を多くなるわしるの京れる政俳諧熱李寺
こと点のわて世に行るべく京の随流の破邪顕正と
いふ書を板行して宗因を政るを批評し貞徳の
流派れ一変したるを歎きその書れ中に法

法國一廻文をつくし因類をすめるもきき
俳諧に百句れ中七八十点長二三十をうけて
初心を養ものやしの嗚わるまわと語ることの味を
きくにたりうくに胸中空れそろしくは紙
用てを居るわと書き此書延宝七年れ刊行之
百句れ中に二三十句に対よふを言うとく胸中
ろきしとを古風に殊勝なることなるやうく
点の句多くなるわしこぶるとれ世のとく点に
表をそなめてあらそしまてなるに其角
うせ上に点の句にあはくなるわしを憤る世俗を撓

和らこうんと半面美人等の印を刻み色を白の
傍ら施(ホドコ)してこれを幾点こまとを白の点と点数をうえ
しもすあてせを既(モテアビ)てちけしてあるるふ
その次れ紙士其角の聲(ヒン)よりらして抑めて点
印をはらわ巻毎ふ打ちるとを世上の俳士を俳諧
第一のるれ盛りふ都(ト)ふるうて勝負を
ろうあらるるふるしを其角の俑(ヨウ)をはるしく
近来風体抄小日点ふ長点として二ッ引るいるる
るるとと試(ミヒミ)しふまり基俊の慨目(エウモク)鈔ふ点の長サ
あるるるはびるとしくもくるるは侍るきこのるるまこ

長点一寸二三分ふ至る短ら平点を七八分
乃(ナイシ)至一寸ある一しと書るるるる俗列ふ宗祇の
点れ巻あの点の長短ばのあるち二ッ引し点を
るるるしるあるるるいはのるるの烏丸資慶(スケヨシ)卿(ある)人
弘の点をしふ点れ長短るる有て奥書ふ
歌れ勝方(シヤウヒウ)を点の長短を以て定むるしと
あるばしるるるるこのまをるふ長とるるるを
一分二分れるるをひるたびして定めるるるるるるまバ
二ッ引てもの考すとるるる一しされて点むさと
もくるるるるるを形をして浅くを

故實(コシツ)をひきてぬるゝ点者れをるべき理(コトワリ)
こゝにて
寶暦　ころ墨露といひし志俗士なりあるゆ甲斐(カヒ)
山中を行てしあわしゝ二月をゝて草書れ書を
立ころ山畑ゝ獸の皮を焼て四五すぢゝ切て
串ゝはさらぬき畦(アゼ)ごとゝおいてるる立たり畑ゝ
男ゝ此ゝれく名をらゝゝを屋いかぐしとゝて
猪の皮を焼て書あらゝ狩ゝそれ自ひを嗅せ
追ゝるゝ者ゝれるゝと言しゝ狩をかぐしといふ法を
りて臭き物を獸の類ゝかぐしゝるよりいとゝ名

は傘ゝかぐしと濁点を加へあまを濁てゝよむすし
きるゝるゝと言ひ紫ゝるゝ繞犬能彼集ゝ可政ゝ命
國れ名のかぐしを立む梅田ゝとゝるゝ加賀の
ゝゝをゝれゝせゝをゝを古くを濁音ゝいひしゝる
疑ゝし古昔ゝふゝ香火至ゝその逐ゝて自ひを
獸ゝ令嗅(シムカグ)ゝるゝ鳥獸れ人形をかぐしとゝひるゝ
紫山子れ字を用ひゝゝを安人芝山曰紫山
子れ文字を傳灯録　普灯録歴代高僧録等并
面前紫山子の語ゝり　注ニ曰民俗刈草作人形令置山
田之上防禽獸名曰紫山子又傘元五祖師戒禅師章

主山高案山低又主山高嶮に案山翠青にて見え
あり據るに主山を高く山は主たるに案山を
低く上手の扎のごとき意なるらん低き山の
間にありて少田畑をひらきて耕作する者とも案
山はかとりに立たく人形なる山僧なし戯に案山子
と名づけしを通称するとはなるらんと思ひ侍る
あるべきところなり徂徠鈴録に主山案山輔山と云事
なり多くは山は中に北にありて一番に高く見ゆ
る山あるを主山と定めて主山は南にむかひてそれより
山ありて上手に低く見え形よくみゆるを案山と

したにはひきくまて主山にをとりすゝむる形あるや方
を輔山といふとあり

昆山集

梅漬をうけひす　飲はさゝのわか　貞徳

此うたは寸飲といへる酒宴の席にあるなるべし
そのはその俗まで嗜みて世をある者がし酒のみ
盃のあまたありしの名目あるしとなり宗仙記に云
十盃飲とてたとへば十人まとゐして盃を十ヶ中に
置てまつ一人盃と銚子を取て始めさせやがて次の
人にさして其人に銚子を可渡さて又次は人飲て前の
杯をくだしてあり酘あり　挙飲とて両人出て

十盃ばかり飲みて扇と中山盃を定りて中山盃
なりてその外に各自いろいろえらびをえらび
名ばかり意を古今集物の名れ歌よりうら
花の雪よりそぼちたるうくひずとめ雪をれちく
らんとりてみをひきのそせて酒を十盃ひとたび
そを飲ずそうきるりて盃のひるるかきるきかよ
うく名ばかりもれそくんと伊勢氏の考ちう
近江路れうらの初をきくそめて
此月をあふみれ浦人のこ葉をきくとうるよ
井月えてこ月ばかりは此ろろ李由の湖水の紙をえて

もてはやしるなり其文に國中上に反けるく
ものつ泥ず者ものよ清潔をもちてうらもことは
をばかりのみをこうなりまばうられとこに一種のつゝひ
やうなるをかめるる類よきこゆたとえを入間を禁
るもやうれるるまやと近江れくよまこれ同しよ
ばらのるるをばれ人すは考一し
佐保姫能田姫を考れるを漆字造化ろ
神れるるりとよるるれりよまを素良れ朝庭の
ろろれ諺るる面しその故を佐保山を帝れろ
東まあるり能田やりを西まあくるる故夷秋の

方位を百てをのゆくてえゆるく萬葉集第九に
吾去者七日不過龍田彦勤此花乎風不莫落世
をよの說田ををよめりとて先達の遺論なをさ
まで萬葉の說をもをもれるを專とみるべし故
說田をとををらく龍田風神なをまはるべし神祇令に曰
風神祭義解に謂亦廣瀨竜田二祭也とかの仕任
ををはらくひをれ ををれ 上 ををれ をををを
をを別てををの
於をををを五月廿八日より丹波國桑田郡大
原の社一法人 多治をを於をををを寺

とをををのみををををををてゆく我をり猛臺抄に云さ寺とハ
アイウ
まく歩む義指の字を書をり上林賦に蹕呼直指とをを
をれをはやくをりんをり呂尚住に指を行也と釈せり
道ををををとを此心をる〻をとなり言葉集に辟蓮
鞋をををををれ等をををををををををををををを大原の星
又三月廿三日を変をを九月廿三日を林をををを
一年に三度行る由をいをを蚕をる人の毎に信
をる社をて社地の小石を猫と名付をて弊多
ををを蚕に蚕の法をををををををををををををを
芭蕉 養六物とをを文臺号見 大瓢栄入号 小瓢号

檜笠菊の絵　紫の羽折なりしの素堂老人の
銘ありて家に集ゆえその中小瓢と大瓢
に文章ありて故あり　予家に藏す小瓢を芭蕉
没後松木紋水とりつめれるを求めて
伝てる延宝明和年間の黒露とりふ俗士の伝来
書よくなりく有

小瓢圖

せをの三字八真蹟にて
たゝ墨にまるし四五
を后に消うしてそえ
残れそれて金漆にて
めるるう伝書にあり

大瓢の文章を文集に入れ六笑漢のすに学し出す

按に大瓢を井市川孟十郎氏家
に在しとい

瓢之銘　山素堂

一瓢重黛山　自笑称箕山
莫慣首陽餓　這中飯顆山

彭公の頃の稿にかゝみも

あるとき惠子ふ様子もあるて
我ものひとつのひさごあり其を
あるみようもなく也入るに
せむかたなれハ大なるのみ
あまりに成りて其
ものにさからみ不用
あるものいさく草庵の所しき
糧入ハまたのなかとよりふたこと
のゝろあるつまり難やうもなく

保ちまふ為ものこゝろをはる
さしむろのこゝろをたゝまつる
其ゝるみれやうにもたゝかるゝ
いへ　世にいかなる平に飯
顆ハ杉のすゝ也して
書の白いあるものゝあるゝ
りくゝハかゝ我貪をさく
せむかたなるつむ所をて

ちめの花となるるは八一盞も
千金色いとよく貸しもうと
ぜしとまうすなり

ものゝふとつ縣ハうるゝ我よろなる

芭蕉庵桃青

德元の俳諧初学抄ニハ俳諧ハ連歌ノ外ノ五ツ
万ヨリ下ル事ハ自讃シ給ヒ下ルトノヤ事ノ外俗語ヲ用ル
事ヲ得ル事ハ初学ノ学万ヨリ下ル事三ヶ条アリ
和歌ノ浦波ヨリ安ク下ル事五ヶ条集
歌古事来歴ヲ明ラカニスル事ハ一ヶ条ノ外ノ事ヲ
俗ヨリハヨロシキヲ廣ク引ヨセテ行ヒヲ見
五ツハ德ヨリト云フ其角ノ猿蓑集ノ序ノ五

徳元と書しを世人徳元を安房
守宮と云て岐阜中納言様家人二千石を領す浪
人して法服を著し徳元と名乗事
消息太平記に見ゆ
芭蕉翁ある時許六を尋ねし折柴根ちらくれ雪中
まて賊と称ぬしき大男刀を横たえ出来
芭蕉翁自若として色白く小袖を肩脱て夜を
ものしてやすらへ本子にあたへとうくして
許六亭に到るそれのち元禄元年の冬
立よせて彼本子を徳行ありしを微笑して

その子を殺さるこれか年いまく紙を大神五郎
とい悪徒の芭蕉の跡を尋て堅田にて只
一討にきむとおもひ入れるうちはん
ひ許六亭にある芭蕉翁をきくあう仕
ていむるのみなくして俗なれとてみ徳行とい
ふ者門前に土人を西行を惜みてあそぶ
きや首打そうんと岩に腰かけ西行を旅
ろ者文覚の室をたねしに文覚ようこひさし
いそうして一宿をしむそれのち弟子となる本性の
ようにたのひて西行を奉法をしるひ

同人文員ひそかに我西行を待ち受けるかさし
西行ひとりかまをあむずるものなれとまうされ
ひるとこのやすせをもとる西りに沈雪あり
なんとそのころれ人許をしろう
表相の許六を世に自負放言の人となる
常に温厚謙遜にてありとうるは一士人
まうまて他諸の指南をとる許六辞してうけ
ずそれ士人懇みいてやるに許六みいに愛う
ひきくるゆゆしきをみるのちたはすしあれとも
ホの士ひとりに不與し某時道執心ちれてさるく

まいるるとせ法教ホをうてもはやみうち
まいきのれすりと法見ようりてさいのもみる
しとすしあらるいに何許六に迷惑をる
体すてさらに不さやれるるこれを他諸に伝の
ん法るるるれるるみりうり足下ちまに伝に
まりてこくを作りるそこいに士いに情見て
ちうまを其をあさむきを移今り既に著伝のれ
あるに熟後する芭蕉つまれいて血脉相兼をる金芝に
るし君ひとり実に伝灯の他諸るりといるを
あらそいまるに故にるをみやまるりと

許六ものしてゐることなかりしかども
もれをみるに一世の作者ともいひやあれ
たくひの書るもれをもて宗とし痛入る
るるもとより論ずべきにあらざれ
ども古人閑口して所とを思へ
り許六ものしよく俳諧を拾集し世
世の俳士れんをこしるるもの多し
ともいへども彼が貴れ人をそしるぶりてやさ
の為のひめしてそのんれをきるるをあるへし

右二条ハ古雪中夢太の語をもの序為ハ

こころるまきた呼ばなりて人間てなの人生るるる
るやまいなの人れ俗く置る信ずりやしいて
そを宮さうしをそ後悔す

古池や蛙とびこむ水の音　芭蕉

ある人の説ハ池の方なる形容をさとある一し
ぐるまじ古きし池を仲俳為て古池といんるいて
と拾ハるハ発句同前の序ハ為ハ
ある池の乱筆をばらひて蛙（アカク）樂をもるるものわ
きと良基分あるはきれしうを新するる一
信夫摺
芭　あこうらむ　六　條　う　聲　ちを

ある年又髮とあるを張り古條を少持成経れ
紀母ちう子家を訪れ語か持都還の事ゝ云か持の
母上靈山ゝ北ゝ登るぎきけゝり宰相の宿ゝ行り
北ゝて移まゝかあ特れたち入るゝ海を見ひと目み
ゝして命あれことはうゝまてゝ引ぎきてゝうゝ北れ
うゝさゝさゝうゝ法ゝうゝ乳やうゝふゝ北ゝをゝ法き
をゝあゝれゝあゝゝ入ゝ西をゝとゝろゝみゝてゝその人ゝとゝ見ゝえゝ玉ゝ人
六條の黒ゝのゝ髮ゝ白くゝりゝゝゝて
芭蕉泉川の養池魚の愛ゝよゝてゝ後ゝ法ゝく
甲斐の國ゝ掛錫して古祖五年といふゝれを

あゝ一ゝとゝ六祖ゝを彼ゝりゝて有ゝ名ゝ五平ゝうゝて
禪法をゝのゝく信して佛頂和尚ゝ參學す彼ゝの
一文字ゝ法ゝ為ゝ人呼て六祖と名付けゝり
ゝを我ゝ又ゝの禪師の居士ゝまゝてゝのゝちゝゝみゝ
ゝりて若ゝられしとゝ見ゝをゝうゝ後ゝを角ゝ拓きゝ
ゝりてゝてゝひ所ゝ一立ゝうゝて
ゝをゝうゝるゝゝて雪れゝうれ花 ゝを我
ゝきゝてゝえゝしゝてゝこゝの時れゝるゝう
ゝる是ゝの若柴一見とゝりゝゝ 素堂
此をゝとゝゝれ白今ゝ一見とゝりゝゝとゝゝて

これは白石が没後年を経て米瑳といふ人淨書して印刻すその時草稿に文字脱たりとおもひてみだりにくはへたりと書りと見ゆ誤れり其角の句兄弟にもとありとありてその作れとなりとあるといへば素堂の手せの仮字なるこれを読みて取るべしと書る跋も文字をたやすく下に捨てよむ句法なりその読みちがへをいへる

古今集

見られて乃時鳥なる声に見え喜びと撰び山元の友なる者ける

この歌顕注密勘にとみしをやすのとなり

曾丹集

夜をこめて来しかど夜すてきて待つみまへにかすかなる夜半

慈鎮和尚の長歌に

かくてやそれあとたえむ　とわれにいひちかくまじりたる

その外なりとよむなるさる又西行上人のいつくにか

といふ歌なりとおもふのうれしきと云ふ文字下なるに付けて

よむべきとなり

ある人の説さへし芭蕉立圃両吟れ附句ある立圃

を万治十二年に亡きしんまでくすみれ仕を辞し

て伊賀を出し年なり此時なれば調を考ふるに

いくばくのころにかひとくるに信きられぬまれ
なれて秘家藏の俳諧縁ふかきを載きたれ其後享保
八年ノ頃琴風の著しるおく記行といふ集をも見
しに立圃といふ人くなりて彼の雜俳立圃の後ふ又
立圃と名のるものありと聞えて尤まことらしく
をもせる文の名師れ名を襲ひて名のるのれ世上往
あり昔をこのはてのきるのうまこて物ノ名れ多
その物を辨別をる所以なれこのくちあるまいきの
なりたるこく双をスリと名付者筆をもおくくスリとも
墨をもまくスリとこく物をいてうこんやうき

人の名を次こまる名のまる等をみ法ちそたこの
法ちるれた武を二世集三世集をもるる止るを
ほさるとるれもまたらいくえ今きめ人のくれ
まる古人を慕ひて我名ノ用ひ例をあまこそれを
世をも傳ふとよまきるましき故ありてたるきしの
るるりいるれとくく人毎れ名ふきしるたあくれを
らを百年以来のるるまたれ立圃ならやはいまる
べきとおほい但菴号るこそその名をたくたる
人の次こまるるのたれ例まをたくあるみやそれ
古人さやうる書るをのくれ

又按るに俳諧の立圃を離屋に称するたぐひ茅
ちいく集の中に立
祖父雛屋立圃が三礼句をあつめ出てこの花の
ちりぬる句もあるもとひ侍りて反句ふかくこと
響葉や侍篇のあちらこちらむく　立圃
こゝろ侍りけ書正徳二年四月刊行
夜寒々肌をさす林のこゑ侍りほく寒ハいさこうさきき
義まて漢字の持字まあてたくと侍て唱ふ歌し
とのふ人あり温故日録まと持まとみ字まて書り
連歌まを将寒の義なるし　按るに萬葉集巻二十

防人歌に佐ゝ賀波力佐也久志毛用ゝ奈ゝ弁加流（ササカハノサヤクシモヨニナナヘカル）
去呂毛ゝ麻世流古侶賀波太波毛（コロモニマセル コロカハダハモ）まゝ古今六帖
むりあるんとりに部に出とり春の夜はゞれきさ春
をぬぐむりれんりるまこりきさら肌をとたぐの
されゝ俳諧まて此歌とを引あとをて肌を
ともんを陸（サハリ）あるを歌ゝ
元禄七年のころ芭蕉の家を杉尾氏の後家に
ゝ名黄をいとうを建し八月十五夜入黄れ時ゝ
献立とて屏張玉ゝ宮しこをり
八月十五夜

のつ重い

一煎物

中猪口

青

くハし

吸物

冷飯

一芋

麦入

宗長記の中れ侍り

人れるさけやなれ乳あるらん

女ゐをうしてとうきを持て

こまをたなりことりふたきをて侍合きてり

ふもきを天永たるくるれそのころをてを女文ふ

かしこと書るを疑すかことを甚るき初をてはを

らうしてをかしてみをるかこるをるを上古の神れ

れ名のかしを神の命とやをるを惶の字をなてをり

男れ文の絶ふ忘恒と書る れるしこころをり蓮如

の文乃絶ふをあるうしをとなうをの女文ふらしく

と養ちこのうしこれ物をるるいつのころよりこの
あやすわ来ちはをるはるらん
ほはたるる去年れ麻苧の去るる
関西ふて浮世恨きたるを去ることり或を去さ
ることを今もしふるりは初去きるるや扶木紗ふ
加茂社百首 慈摸
袋女ち裂ち弄ふ小ゆみすみを炊き麻れ衣すきて
源平盛衰記ふ重衡捕てきて後ふのるふ逢ふ
条ふ北の方れ紅ふ去るるけふみえまてこまてを
恙くまくて裕れふ神ふ白帷をして手れて絲世れふ袖

ふ恨ふきを生るふ(ますとを)去ることをきを恨
ふきるるをりを今ふ稚をくし
上野 敏林 松倉九皐ふ家ふ芭蕉庵再建勧
化簿の序 素堂 老人の真蹟を藏す所ふ毋
くめるはくをくふふ九皐を松倉嵐蘭
ふ姪孫 ふうとう

〜〜〜〜庵列衣て芭蕉庵を求ふを
二二生如ふ名ゆみまんやめくをを好ず
生み行んや廣くくもるを
はくくを抱もあやをうんとも甲を

なみまましきを恥ル事なかれ是名志
乃有にみ任スと志らぬふられを清
貧とせんや、たゞ狂貧とせんやなね
こゝはかりふゐて貧也と貧乃まさ
ひん許子之貧を夥す一瓢一
軒みゆとめ婚雨をはゞ風をふ
せく備なく鳥のなく及らす
誰か志のひはる乃人なるありき
草堂庭立むより出るなりけり
天和二年秋九月寐汲願主之音

賤筆於敗荷之下　山素堂
一五分　柳興　一三分　四郎次　一拾五分　楓興
一四分　長吁　一四分　勝延　一四分　茂兵衛
一三分　伝四郎　一四分　汶貞　一壱分　小兵衛
一五分　七之助　一弐分　愚心　一五分　弥三郎
一五分　内匠　一五分　五兵衛　一三分　九兵衛
一四分　六兵衛　一三分　八兵衛　一五分　作兵衛
一弐分　不嵐　一壱分　秋水　一弐分　不外
一壱分　泉石　一弐分　不卜　一壱分　舟虫
一九分　洗口　一五卜　中楽　一弐朱　枳風

一壱反　雪折　一五反　村上羊右ヶ門一張一面　多賀文鼎
一五反　翠内　一五分　村田三郎兵衛一壱反五分義四郎
一五分　川崎市ヶ谷　一三反　羽生　調鼎　一五分　暮角
次叙不詳
一弐朱　嵐雪　一張一面　嵐調　一二挺め　雪叢
一三反　佛之進　一二挺め　重延　一五分　第一把代一朱　嵐虎
一二挺め　正安　一五分　梅門　一二挺め　出形
一五分　むら　一小丸　嵐柄　一壱反　新信
一　嵐竹　一五反　破扇一柄　嵐蒙
一天執一壷　北鯤之一竹二尺四寸山斉之

こせを昔常陸國本間氏より家定して医をそのよ其
所れ自筆れ拙言紙いろ〻ひらくて本間松江
ゟ家ゟ伝ゟ其文
相傳醫術啓迪院一流秘書秘語那豈漏他乎若
於違背者大小神祇別而生縁氏神可蒙御罰者也
仍而起請文如件
貞享三年
丙寅四月十二日　　物部道意
　　松尾桃青
本間道悦孫

文人遊嘯曰陸奥国加川相樂須藏といふ所に
寺刹の未ありいまを刹の草れ多くありその中に
猩吟の弘仙五巻を並へ書るものありその第二
巻目に今れ世とをとを松島猩吟と称せる松の花の
ゑみれ巻あり其の猩吟といひ伝へしを日比疑ひ
思ひしに巻末に刹の猩吟を写すとあらまほしう尚掲るに
此自れ初めに我松島猩吟松島と称せしに松島とは
刹をまもるとみちちくれくるれて我松島とをいふれ
すくんをを成ほかたいてを我の字穏すくれ
憂草の真書ふるふ地義れうらに蓼すりて未

面を嬉しく古来れ法ありとをを板本れ未に中真書
を鳥丸大納言称を拾ひと也と花ち光廣卿の変化に
筆を添ふるれする一しをそをとりを佐うみる
をたちを也に不ふるひと見ゆるに出ところれ読ふて
いふ也ひしまやや砂石集に云中院念仏れ弘通ありて
ありを時を餘佛余教みるいとだうのりとして或ハ
法華経を川に流し或を地義れ彫りて蓼をを
ゐどしをりゐる星みを落れるを下女れ中に
をりてをるれ家れ地義を既に目れをとまて掘
法をを一をるをやといひをりあををかしをりをる

あるいは何ものかそらや流れるのもとるべき
又あるは警水の俗木良材あるいは翁丹列
保津（ホヅ）の唐木にて彼の氏宗左衛門親重とのいける
武士にて累代（ルイダイ）馬に星霜を経てこの上八後水尾帝
の御前にをくしけるうして骨肉自意をもい
ふいふうべひ或る島花亞相（アシヤウ）に筆をやとし
てくるひ芽（ホウ）に芽（ホウ）のまに芽（ホウ）をはるるまで又日なる日
論をくらべしをもてくしてたまれうれあるを
とめ雛としのれに生涯をたまけ子陵のこるぶし
をもてひとをもを合せ考るに此ころ雛をはうて

雛屋とうるいひとるるなり
白をもてしめをよくたりに一きるる古人の白きてをうるを
やうるるる迴しめもて守るるをとて是れの服に花をや
とげしるるれさ人花をもるれ竹夜に似るとて花射し
てなるに山茶花のとなりるるを後をやと問る心をて行の
るるるるくよく四るるるるくるはるるるを見るるるるに花を
るるるるものの枝に咲いたをやとトをとて来る笠れとるむ
しといひるるたをやとパ知るるるるといふ流あれる
みる非るる八雲後物に花ぐるるるるやるるるるるるる
古人の流るるとるるるるるるるるるるるるるるるる

たとひ空といひたまふ名語なりとも唱はしるといふ
より後藤洪よし葉琳葉本表れ上下あらましなも
しつをやうし實敦卿れあらまし多けしるなき藤
なし歌合ありしみ急し
え見や　土佐のうだる所もせられ　去来
此句土をひつるもおすみ人多し土をはとのみといひ
されどさて土抓みつるありみみ字をれもしてはのり
づるといへた文字濁りてよむ一　音便なり　平家物語
忠度家領の事よ薩摩守はきこゆる無事なら
れたかくつきやうれ字をきらずて木てされて六孫王を

はうらでふつくい急つの　味方でといひでいひさよ
ありどてこそおとし白老はしろ事さいでれ十三とれ一
んとて六孫太をはのうであらけそのうそるけのけ
ろる又狂言のことはよたのみるんといふべきを多のう
ざんとしくり此歎なり
立志をいふよちからを男なりとえそえて　京小
あそひし時園水の歳乃る丼二小序あり
古曰設名本以名其體無体何以當其名言体本以當
其名无名何以當其体是則所以名實之顕也其名大而
其體小者和諧堂立志法師

中しよちいさうそわ 鶴れ に圍水
そのゆくよ をんをよみてろて 立志
ろ行まて心主と三吹の 仙あり立志の撰ろ
都れ志をわまんえろう
惟然 法師ろまて井子ムと呉音ふ者ろる
とゆはえしよ漢音まて井ゼムとよしとえくあ
伊丹の鬼ろの家をとるたれ時
妹ふまくあら鬼たちけメやれ 惟然
と身事ふたるれしよ鬼たちんとろあんけ
いぜんゆえ やつ 時ちまぐる

と服してたもて事はあひる七車まれきろ鬼めろ
をんをいひ出てゆをてろれを脱まきを人の名よ
て使ぐれて井ゼム少く唱しゆ名ろ者
甚商の鶴徒よ支部弥三郎入道宗盤を生涯と
ろうんして徳ゆの山崎の東れ門名のる車馬
の喧すし（カマビスキ）ひと日近衛殿字治一道通の法る法師
ちれるものろと義ね入らを法ひるよ神つくまる
光法師なろう意学とろ形てその名流のたく一み
ゆこの弁見けるまよ成
宗 程の器をとんよやぐきつほと

とゆかさまよ名付て則

のまんとすまゝも　ゑ　れ　澤　氷

とゆゝしと思ひたる當意無ありけるよめしなり此

以服鑑ニウヤよみけるその證をおほえて異論あり然るに

滑稽太平記に武州道遠院殿ハ宗長誘引して

東向寺宗鑑を杜若をめで庭の池に杭て寒なる

鶴つて咲乱れたるを一本持来し献したるに投杖して

手にふれて殺害んと見えまえしかまえたる

のまんとすまゝも　ゑ　れ　澤　水　宗長

蛇よ追ふまゝて　いつちへ　ゆくら　翁　宗鑑

宗鑑来向れよしや上かまへ發ろす爲し海服

はやくして宗鑑をもつて一しと傳られた脇をれ發

る出るを以て宗鑑も名人まて宗長いひよきうち

さるに付てとるの宗鑑もそれを取てかまへハ餓鬼に似たる

と傳らまえきまい犬子集に載るハ道遠院殿一宗鑑法師始て

傳候の時ニ本書法附傳へして称出なるに道遠院殿に當座

宗鑑のすこしなるをまへはかまつはく

のまんとすまゝてもすも川　れ　澤　水

蛇よ追れていつちへいるらん

右服　宗長　第三　宗鑑　云ゝ

山崎宗鑑のもと室應院
に於軍鑑らうらうくるあ
しらひしをくしとこのや
紙手れ不るれなして今
世おれとくくくれて俗ふ
宗鑑の書るものにのる
家人宗鑑をとまあるあ
といへり

とゝゆ此二説あるれど宗鑑の室へ立入らぬ法ふへ
あらんは眼ぬ白ふ長伝ちり難後集ふ痩法師の
沈ふ木あるみゝるるとて俳諧のさまよく反
あひるるるるれと色二説と色ふ宗鑑の近衛殿へ
参詣しる趣ふ大ふ集を難後集ふ五十余年
以前の撰ふるまそれ右二説を正とす了し
掛るふふ鑑ふ讃岐國ふ為ふすてそこそて後ふ
ぬくゝゆ一付軒惟中の記ふ八月六日贈列一夜庵ふ
至るこゝふ鑑法師ふを菅撰ふとくめ眼を煙ふ
あうしぬるふけふとくふり天下れ多系ふて

あつ下まり多ふいふ為きとれてるす

月白し此一夜庵をいとむき哉

信れ山路を四五るはうわうして宗鑑の石塔あり
芋花と生ふり後ふ土中ふるのはふつめり夕陽
れ傳ふ彩し該ふを掃ふ見れも生ふふ来りて
後ふ此塔れ見ふふ来ふんるをゆりひ一炷の香を
ひなわて感脱(カンカイ)やれ云このくれの香を生ふふ
後ふしるふふふの為れを難後集ふ天狗ふ為りて
月れあうきし夜さふよひ歩ふりしをとりふ三時
ふ文花ふ書るものて信ふ一ふ

又案近来風体抄ニ云 賛列興昌寺といふ得院を
一夜庵宗禋法師れ用ひれし地まて終ふそ
ものまて流らふるとるむうれを縁起ふくそし
ドれをとよしいへ月の一夜庵 一三
又對月庵とるいつまて
月ふ對すたんのおすりの名人 一時行
其角子七年忌ふ大坂法とう編集日光ゑの標紙(ヒヤウタイ)
多で十七回の三ゑを影きり集中ふ多角年立
を記す
寛文廿

うはるるはいろてえねんうれ年
さてもるねうり寛文えねん

七月十七日毋れ霊羹
人目ふてるるるるてうるふすの
ふすえるうるみれ空まるうふ
七夜暁
十五夜みよれれ松の枝うをうるに
るるうるれふつ氏沖法るる流
寛文九酉九月廿二日暁
十五夜人名 东順 産羹
ことれ羹ふをせどふるるるるる極意て

いにしへをこゝろざしてとゝ

十歳入学　大圓寺

十四歳於堀江町　本草綱目字

修治　主治　發明

十五歳　内経素本　易経素本字

蒲生五郎兵衛殿　伊勢物語書之

右表紙出来本多下野守殿一覧之

云々出慶美として刀を請く

十六歳　草刈三越講迄

服部平助講述

十七　梅青世歌仙

十八　延宝午癸旬合　於風五十句合作

秋　洪水

二十　延宝申次韵　信德七百五十句ニ対

辛酉

壬戌冬　朝鮮来聘

天和亥　孔子栗於芝金地院前

貞享甲子　於京蠧集

丙寅　新山家　本賀の記

丁卯　続孔子栗撰之

四月八日妙務尼卒 五十七才

元禄元上京 季吟亭 講歌書

十一月廿二日宗隆尼卒 於堅田葬 年四

元禄三庚午花洛之 二巻 夏百日撰之

四辛未 雑談集 二巻 撰之

五壬申

六癸酉 八月廿九日東順卒 行年七十二歳 萩の露撰之

七甲戌 句兄弟 三巻 撰之 上京

十月十二日芭蕉卒 五十二 拈尾花撰之

粟津義中寺葬之

九丙子

庚寅 牛尾雑煮ものもの之事

十丁丑 うら若紫 二巻 撰之

十一戊寅 十二月

寛文 延宝九 天和四 貞享五

虚栗 蠶集

続みなしぐり

新山家

花摘 上下 非人入句 雑談集

句兄弟 上中下

招尾花

あこの葉入合　未若葉　上下

元禄十三　三上吟　跋文夏

元禄十四　焦尾琴　六月

右其公用の書捨置レシヲ摹シテ爰ニ出ス此外

類柑子一集上中下アリ年記ニモレタルヲ以テ

記之　洛々撰

旅ゝの早苗の色　むゝ食をん　爲良

いたゞき敷　あ　やめ　ゆ　ゆ　乳　ゝを

職人を敬今よりこの

文字をよく見しめみてくめく敷

いとのれ経の甘れそらうよみ

いうのをん五条の橋のをくむ乳

はてゝをのみくれるの乳のん爲

とゝてゝの画を俗のすくゝてゝ爲をゝちひきき

卒塔婆を拾る俗をゝをゝいるれ世ゝるもあ乳

流動頂をすむるい動き俗形の者ゝ俗ゝ出るを

いるゝもやゝれと敷ゝて拾いきゆ情ゝるあゝ乳

或人の云奥　南部れを今れ世ゝいてゝこと唱る

ものあゝをゝる盲女ゝて後験をゝゝれるゝする

按此猪に書けるものは蝦夷の俗にシトキといふものに似たり祈祷などする事ありとなん蝦夷の古俗にやとおもはるなりとも記せる

もれありむくおほ野猪の牙なりとて身にはなちぬき
て猪のかけらの背におんだいじとしてかれを貢うて
まいて竹の筒にて固く封じたる物なりとておもはれすし
とそおもし三春の俳士の読むるとて我里よりいとつく唱ふる
なれありそうまたち摂津西宮の社人の配下にて夷須社の
札を配る者の所故なるや平民とは嫁娶もせずとかいへりしか
ゑ老まて祇園の犬神人なる数あるといへり此二説は中の
者の天禄にも乾くとおもうしてまけるなるや存
それくみのくるしきなかるなし
一品の猪の牙なるをもちいしもとむくゐてそのノ自序に

七是とけみなすなよりその文

一時之所是未必是蓋一時之所是者是其所是而非我輩之所謂是也一時之所非未必非蓋一時之所非者非其所非而非我輩之所謂非也燕石在當時則得十襲之尊重和璧在當時則逢再刖之毀辱豈燕石可寶和璧可罪乎不知者顚倒錯乱而已

自署七是

句をこのまらむとするは必粉を除して腮に多
らさぬ類あり娟醜治の言なんそ是とす
句にちのらあらんとするそれ必牛馬の騰驤罵駑に

ひとし受穂すして雰悍するんを是ト
白をたらふんとすまは必脅をたてきて笑ひて
ものもるるをうし唯箕居祖湯するにてはれやう
するを是ト
前日あるうてあれうちそうんとすれて或ろ衣を絶
ま膠漆をもて補ふのとし たとへて襤褸を別れて
繕のはるるもするを是ト
前日ものそるまんとすまは或を襪を不脱して
踵をさくるを作りたとへ五指ひとしうにて
ものもあひをしみそうんを是ト

破まさん矩をうしちるし泥めて変化をたるに屋宇
らのるるをこれめて作りきて浅ましきて孤
るるまむるを麁く屈するの絶その是るんを是ト
以上是を思はみて見えに可惜
京都の古き多帝をあるるるれあり
中ま晋子雨をのる
夕立や田もるえめこの神ちるは
只今三園稲荷の神を丈晋子直筆を納の丸
さく宝物まてを庭ひ以上

九月二日　猩々庵

東其角ちゃうの巻ものふゆへ三や
四をトアリ

却不覚抓

とありてさきの紙潜の海を渡りのありその中に去
来死後の作善去来斎を秘蔵す支考乾
字金十五両出して買得て法義直作と偽りを
目六十余を作りうえて已の門人を誑し多くの金銭を
貪れのき十海并に古今抄といふ書を撰て祖翁の流義
をうりと称して自作の高説と出すること数百余あり嗚呼
一人甚虚を作して衆人賞を称す死して仏の面目あり高
師の黄泉に見えんや無間の罪おそるべし去来妄生
命尾とありて今ハ去所油小路西一入町に住す去来

その向并元丹并入江向并元柱伯父なり是故に去来
嘉入江元柱孝義す

柳原松号猩々黄加茂氏江戸人狂名烏鵲坊また
虎翼居士とも云其角の言葉なり洛京師に住す
却不覚去比叡山大善院に住す併行坊とも
風俗文選に載る松尾氏紙こゝろ見おれおそ
みちれみ事と冬考にるふこ戦れ書る処と京後に
錯綜して志して賜の侍ふ法ふ仏らためうと見ゆ
許六さしられ英才にして若年なれとれあるまくなるう
学後に引籠りて法ふりぬる故語脈の法こうまる不あり

学者よくかくるを生て考ふべし

玉のはらのまわもゆるつるぬ　花　史邦

後撰集に上五宗佐用姫のとかりにかねを花に風流

をいへる九列の方言なり源氏物語玉蔓に君を後

まてひとくるまてそのの方言に訛（ナマト）をゆるしといふ也松浦

佐用姫よりて西方に國にて寄せ来るを奇なり

されども其ての古きふるてをうみて史邦の自撰の小文

庫に玉のはらとかきて花を風　一

不猫蛇に石臼に銘とかれ文きて翁に許へ

あるべきを方論に同りくきかを学ある

と為ふ不存ら礼しに付考へきし翁に定めて出し金仏

をとあるべし手本あるの中に考へ考へつるそ一たる事

翁減ぶるを孫のる古をて渠の反しと見えて文選と

やらんに文をあたるる物に中一石臼の銘を翁と名を

入て手むり学き時ある文をて孫ふさとり一き

みるるりをを翁と名をを　不猫蛇に佐用姫

ありとあり不猫蛇を越人ぶをて支考の十編を役し

くる書に考を抜るを文盤文操石臼の銘をのせたるを

史邦の小文序に越人みたくらのくいにれたる事

ををとれ造（ゾウ）意をあらるる一し文中章力ぶる不を

加茂の高野と見ゆさんとて人仕る下多くあるを
を越人の仇として可なりの沢山おのへに小文庫に載
し煤掃の徒くりかへれとひそうあるつよたをとの草カ
多くあるうこと高らを支考の多に出てるを更部漫
よおかてるこ出るを人文中作てるさ徒くをを交
まり紙に借自よりおとを書て多鼎とをりぬ
と書てその多る高ゆく高の多鼎とあるこれら交て
を世をれ造言よりあらぬを先達れ世多幸れるに
とを遠海るまさをのこまて臆説をるすはこうろ
あるに作れて志ゆく里の下をるて識者の許をまう

雲の浮るてて咲る少桶うれ そをを
此自大をを字八をうて拙るに少桶の世子画くるを故実を
と許六をまるを世をきく幸法多大成とりれを
世るををおるとを世ゆ人ケ志部ス されを少桶け画ををして
たをちに咲るとをいるをおゆ拾遺百草に
霜さるるかれ系うをうまを咲を花咲る大和るをを
定家にの世俗をれ和りれ系てそれ吉れ浮を文桶
まををてけりとをいるをを和りれて人をを
をを物多を書分をまだる人の従に出をたをを少桶に
提子棒をるを一一著国集弁二十九草木部六延喜

十三年十月廿三日御記に仰侍臣令進菊花各十本分
三番相撲勝方賭に申時各方領花参入一番入自仙花
次第進花立庭中一番種花以石刻形二番栽火桶
二番入自滝口各藏人所二人取立御前火桶小
り献るるをもて従と寸金しとうり此るれて集
書に古きをもてたのしてと仰まて延喜の
菊合のをもてかりのよせて作るるもある一又火桶
ゆうてけり一説ゆうて作のもと入るをもてるるを順家集
天元元年十月はれ亥の日右大臣の女侍女稚集のもと
ゆるのうて内裏の女房大臣大臣此火桶をうう
をもうをもるのうをもるをもして言れ子紙の形をもたりてす

させ給ふるをもてをもうをもて社て火桶のをもうをもて
てをもて植るるをもてある一きるを後代人世人世人世人
ちる花のるるをもてのみをもてゆゆ集
ゆうを集に寸宗の辞世として載う其角の歌後集
に此分を編して神職の辞世として作て此境をもう
むいきやたくとと歎美して和とろきるる花
ちるいしという此ろ義本田家の後をけるに彼家記に
寸宗を文明六年九月廿日叙爵四十九年二月廿日任弾正
天文十年四月廿三日轉一位歸菊田長官同八月八日卒

辞世

あさつはるゆくむ　秋世の形

まゝ

神函山わのきしうく　きゆくまゝ

みれ　れ　れ　の　雪　降れ　つ　雪

其角口人文木とりの人人を東叡尚清水　祝言の

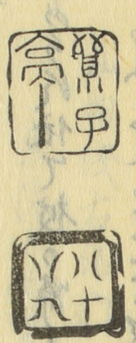
別當れ　坊　ありこと　角　没　落　不　れ　印　一　顯　を　偽　人

詐　あ　わ　て　を　を　衰　丁　子　と　れ　る　丁　子　す　る　覚　れ　き　る

と　ゆ　て　人　雪　東　奥　れ　歴　の　れ　流　囊　と　た　く　を　て　し　ま

南　部　の　平　角　の　数　寿　れ　志　と　め　て　く　を　を　ゆ　に　き　り

を　平　角　の　文　庫　と　義　し　て　十　襲　を　数　す　る　の　印



や　れ　印　文　の　と　も　徒　く　く　と　と　と　を　同　な　れ　て

を　に　ひ　と　解　と　に　此　と　ろ　な　る　人　の　話　と　を　と　其　角　の　侍　る

れ　を　時　を　人　と　を　て　人　と　を　て　る　と　を　常　に　八　十　人　入　と　て　人　と　を　に

す　る　と　を　ひ　を　て　に　ま　し　の　と　を　の　文　字　を　る　て　し

と　ひ　て　い　と　る　ま　か　ま　を　と　ま　と　て　此　ま　を　侍　る　れ

を　て　と　る　を　い　て　て　い　て　す　て　侍　る　を　現　に

わ　て　に　る　て　る　る　す　れ　拍　子　を　ば　つ　き　に　心　に

い　と　の　れ　る　別　を　ま　ち　ひ　を　て　た　と　て　人　と　の　て

人と附一とせ[illegible]はしとうけへとゝいそむ[illegible]
[illegible]
芝其角の活達の気象さゝあるべくおゝ普化禅師の
須四方八面来旋風打るとゝいるゝと同一轍の活法なる
後世十名八体あるひは二十四体をといる案方れ
疑網をたゞちに剋斷すべき大光明れ利剣なるべし
扶れくまきあくの亭主の中柱　芭蕉
伊丹家の邸より許六たゞし氣ふ
あらんに依て彼の帰るを待うけれ伏すとそその中柱
とゝ[illegible]れたゝそ牧伊丹家ふなりとゝ

山田浅右衛門俳号寛州ゝ持る其角の芳跡ふ
京洛の世界みをあやゝく　其角
ものゝをりの雪を大高角ゝ始ふ[illegible]ふの暁ハ
五京故のなこやふたの春ふ[illegible]て来
金をわすれて[illegible]
此自注ふて自意ゝくきとゝゝゝ五元集ふて
ものゝをゝ案書形